

体験型イベント「大学で防災・地元で防災：みんなで体験！どこでも防災」レポート

静岡大学
社会人リカレントセミナー

セミナー内容
「ジェンダーと防災:性的多様性と妊娠・乳幼児」
「性的多様性(LGBTQ+)と災害」「妊娠・母子の防災と支援」「乳幼児を守る災害対策」
山崎 智子 赤井 智子 原田 博子

体験型イベント
「大学で防災・地元で防災:みんなで体験!どこでも防災」
コーディネーター:白井千晶

日程
11/8(土)
13:00-16:30
17:00-19:30

場所
静岡大学
地域創造学環棟 303
3031 に変更あり

参加方法
①会場参加 ②会場参加(食事付き) ③オンライン配信

料金
参加料 3000円(体験型イベントは無料)

お問い合わせ先
静岡大学:白井千晶
shizuka.chikaki@shizuoka.ac.jp

▲体験型イベントのチラシ

11月8日(土)17:00~19:30に静岡大学静岡キャンパスの地域創造学環棟で開催された防災の体験型イベントに参加した。

本イベントは静岡大学ジェンダー研究所が主催した。開催の経緯は、コーディネーターである同研究所所長・白井千晶教授の、静岡県立大学小鹿キャンパスの体育館で実施された宿泊避難体験イベント「避難所Camp」に触発され、静岡大学でも大学で避難したらどうなるかを考えたい、という思いがきっかけである。静岡大学で宿泊を伴うイベントを開催するにあたっては制約が多かったことから、まずは日帰りで防災の体験型イベントを開催する運びとなった。すなわち、本イベントは静岡大学での防災体験型イベント初開催・キックオフという新たな試みである。

今回は本イベントの一部に協力させていただいた静岡大学学生防災ネットワークの塚本由喜美(静岡大学3年)がレポートを担当する。

17:00~18:00 避難体験「災害時のトイレとご飯体験」(地域創造学環棟 301 教室)

① アルファ米とじゃがりこサラダ〈西豊田実行委員会 with お産ラボ防災部〉

〈新聞紙でお皿作り〉

新聞紙でお皿を作り、新聞紙のお皿にビニール袋を被せて使用した。そうすることでお皿を洗わなくて済み、水が限られる災害時に便利である。新聞紙でスリッパ、コップ、エコバッグなども作成できるので、実際に作る体験をしておく災害時に役立つ。

〈アルファ化米とじゃがりこサラダ〉

教室後方に用意したポットのお湯で、アルファ米とじゃがりこサラダ(じゃがりこにお湯を注ぎ、しばらくした後に混ぜるとポテトサラダができる)を作った。

〈水で作るカップ麺・カップ焼きそば〉

災害時にお湯を沸かせない状況を考え、カップ麺・カップ焼きそばは水を入れて30分経った後に試食した。

～参加者の感想～

- ・「水で作った焼きそばは歯ごたえがあって美味しかった」
- ・何種類か食べ比べた結果、お気に入りのカップ麺トップ3の発表
楽しみながら参加されていた。

② 段ボールトイレ 〈藤枝市ふじのくに防災士委員会〉



実物を見せながら、段ボールトイレと携帯トイレについて説明していただいた。

〈段ボールトイレ〉

- ・ 段ボールトイレは軽くてすぐに持ち運びできるマイトイレができるのでおすすめ。
汚れたら燃えるゴミとして捨てて、また新しく作ればよい。
- ・ 段ボールを丸めて作った芯かペットボトルを柱として中に数カ所入れると、座っても潰れにくくなる。
- ・ 新聞紙 or 猫砂 or ペット用シート（消臭効果がある）をポリ袋の中に入れる。

〈携帯トイレ〉

- ・ 携帯トイレの中身を実際に開けたことはありますか？

→女性用携帯トイレでも上手くいかなかった場合や、被せるタイプで小さくて上手く被せられない場合もある。

⇒事前に1回試してみることが大事！

講師の吉田さんは「段ボールトイレの作り方（下の写真）を参考に、試してやってみてください。試すことが大事で、頭の中で考えるのではなく、自分で試してやってみることが大事かなと思います」と話した。

▼段ボールトイレの作り方



③ クイズ〈復幸ボランティア やらざあ駿河〉



阪神・淡路大震災の後に作られた「クロスロード」という究極の2択のクイズを下記2問実施した。
表に「Yes」、裏に「No」と書かれたカードが参加者一人一人に配られ、過去に実際にあった状況に対して Yes か No のどちらを選ぶかをカードで示した。

- (1) 避難者が100人いる避難所に50人分のお弁当が届いた。あなたはこのお弁当を避難者に配る？
(Yes：配る No：配らない)

〈Yesの参加者の意見〉腐らせてしまうし、空腹の人がいるかもしれないから。/半分ずつ分ければよい。
〈Noの参加者の意見〉災害時のストレスのかかる状況下で対象者を選別するのはよくないと思うから。

【復幸ボランティア やらざあ駿河さんより】

〈阪神・淡路大震災での実際の行動は？〉

No（配らない）：行政の担当者が平等性を優先し配らなかった。結果、全て腐らせてしまった。

〈解説〉

- ・同じ問題でも自分と違う意見を持つ人が沢山いる。
- ・違う意見を持つ人と話し合い、「30分待って来なかったら配りましょう」のように**3つ目の案**を出すことも大事。

- (2) 避難者が100人いる避難所で100個のパンが届いた。パンの配布中に「足が悪くて避難所に行けない祖母の分のパンも分けてほしい」と言われた。あなたはその方の祖母の分のパンも配る？
(Yes：配る No：配らない)

〈Yesの参加者の意見〉頼まれたら断れないと思うから。

〈Noの参加者の意見〉本当に祖母がいるか見に行く。

【復幸ボランティア やらざあ駿河さんより】

〈阪神・淡路大震災での実際の行動は？〉

Yes（配る）：配った結果、他の方からも配ってほしいと頼まれ、避難者の7～8割しか行き届かず、残りの2～3割には配布できなかった。

〈解説〉

- ・ 「自分が思っていること＝みんなが思っていること」とは限らない。
- ・ 配ってしまったらどうなるかは想像できること。
- ・ 実際に起こった過ちを知っていれば、避難者1人1個を守るなど適切な行動ができる。
- ・ 全員に行き届くようにするためにはどうすればよいかを事前に考えたり、避難者以外の人の分も配ってほしいとお願いされる場合も想像しながら配ったりすることも大事。

【おまけ】



～普段お守り代わりに持ち歩いている防災ポーチの中身紹介～

- ・ ポケットトイレ
 - ・ ミニライト
 - ・ ペン
- など。

左の写真のように実物を展示して参加者に紹介されていた。

18:00～19:00 選択プログラム

下記①か②のどちらか一方に参加する選択プログラムを実施した。

① たのしくまなぼう！つくってそなえよう！クイズ&防災ボトル作り（地域創造学環棟 203 教室）

〈静岡大学学生防災ネットワーク（学防）〉

小学生以上を対象に防災クイズと防災ボトル作りを行った。

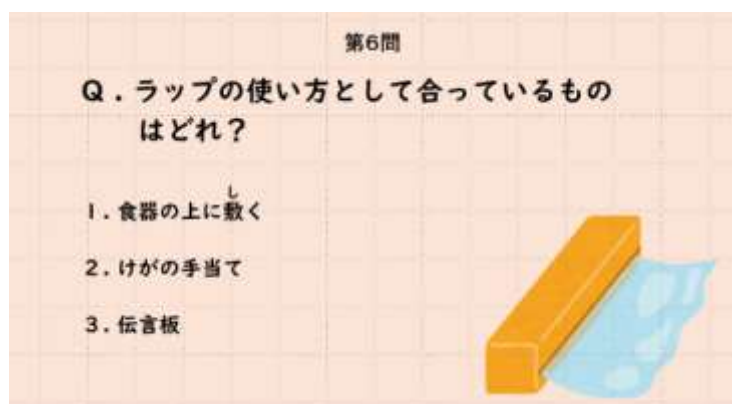
(1) 防災クイズ



学防では防災を「楽しく」学べる防災啓発活動をしており、この企画もクイズによって楽しく学んでもらえるよう企画した。

備蓄や避難行動に関する3択クイズを6問出題した。参加者は番号のフリップを挙げて一人一人回答した。

下記に出題したクイズを1問紹介する。



(正解は次のページ)



第6問

かいせつ

ラップにはなんと8つの使い方があります！

- ① 食器の上に敷く
- ② けがの手当て
- ③ 壁にはって伝言板のかわり
- ④ 細く丸めてひものかわり
- ⑤ 丸めてスポンジのかわり
- ⑥ 防寒具
- ⑦ ごみを包むと匂いが漏れるのを防ぐ
- ⑧ スマホに巻いて防水対策

第6問

災害時にやってみよう！
～ラップを使ったけがの手当て～

A. 切り傷ができたときは…

ケガをした部分をラップで巻くと治りが早くなるよ！

B. 骨折したときは…

- ① ラップのを長めに出します
- ② 骨が痛む部分にラップの芯をそえます
- ③ ラップできつく巻きます

(2) 防災ボトル作り
〈防災ボトルとは？〉

防災ボトルとは

- 必要最低限の防災グッズを入れたボトル
- 防災用品をコンパクトに収納できるからカバンやリュックサックに入れて手軽に持ち運ぶことができる
- いつも防災グッズを持ち歩く「0次の備え」で防災力を高めよう

防災ボトル

500mlウォーターボトル

ホイッスル

ミニライト

圧縮タオル

エテクトシート

消毒剤

アルコール類

AcmeAcap

アルロール類

ばんそうこう

非常食

現金

現金

ポリ袋

〈防災ボトルがあるといい理由〉



- ① 手軽に持ち運べる
- ② 水筒としても使うことができる
- ③ (容器が透明なので) 中身を把握しやすい
- ④ 各自でカスタマイズできる

〈防災ボトルを作ってみよう！〉

防災ボトルに入れると良いアイテム (①黒いエチケット袋、②ばんそうこう、③アルコール消毒綿) を一つずつ紹介しながら実際に参加者にボトルに入れてもらい、一人1つ防災ボトルを作成した。



◀完成した防災ボトル

この他に防災ボトルに入れておくと良い物は、

- ・携帯トイレ
- ・ミニライト
- ・圧縮タオル
- ・現金
- ・一口ようかん

などがある。続きは自宅で自分にとって必要な物を入れてもらう形にした。

防災ボトル作りは、参加者に形に残る物を持ち帰っていただけるため、イベントの帰宅後も防災ボトルを活用してもらえたり、家庭で防災について話すきっかけになったりするというメリットがあると感じた。

今後も地域の方や子どもへ楽しく防災を学べる機会を提供していきたい。

② 講座（地域創造学環棟 301 教室）

(1) 妊産婦・乳幼児が被災したら：助産師からのお話〈稲葉由子さん（静岡市助産師会）〉

〈はじめに〉

- ・ 人口比率：健常者は約 60%、高齢者は約 30%、心身障がい者は 7.6%、乳幼児は 4.5%、外国人は 2.2%、妊産婦は 0.6%
→妊産婦は他の要配慮者の中でも少なく、マイノリティであるという印象を持ってほしい。
- ・ 過去の災害時には、避難所に席を設けていたが夜中は怖くて車中泊をしていたり、日中は自宅に戻っていたりと流動的に動いていた妊産婦が多かった実態があった。
- ・ 東日本大震災は長期間だったため避難所に最後まで子どもを含む家族がいたという話はよく出ている。しかし、熊本地震や能登半島地震は限局的だったため、出産できる場所を探して避難所からいなくなった。
- ・ 熊本地震では出産後 1～2 日で退院させられたため、産後 1～2 日の親子が車中泊をしていたという話も現場の保健師から出ている。

〈東日本大震災での妊産婦のニーズ〉

- ・ 災害弱者として認識されていない。妊婦であることを気づかれていない
- ・ 避難所に救護所はあるが混乱しており、受診したいが病院の状況などの医療機関に関する情報が届かない
- ・ 栄養が偏っている
- ・ 脱水や便秘
- ・ 運動不足→静脈血栓症・精神不安・不眠のリスク
- ・ 妊婦であることを理由に診療を断られた
- ・ プライバシーを守るためにライフラインの通っていない自宅で過ごした。寒さに耐え忍んでいた
- ・ 他府県や東京都で妊婦を受け入れる事業もあったが、受入対象が妊婦のみであったため、家族や自宅から離れたくないことや、地元からいなくなることに對して周囲からどう言われるだろうかといった気持ちの問題もあり、なかなか外に移動できない方々もいた
- ・ 仮設住宅：高齢者と同程度の優先順位だったが人数的に高齢者が優先され、なかなか入居できなかった

〈乳幼児を連れての避難所生活での困難〉

- ・ ライフラインの停止→飲み水がない→ミルクを作ることができない
- ・ 離乳食がない
- ・ トイレがない、おむつがない→不衛生な環境により、おむつかぶれや湿疹のリスク増加
- ・ 授乳スペースがなかった
- ・ 乳幼児の泣き声などの配慮に気疲れをした
- ・ アレルギーの心配があり受診したいが病院で受診できない

〈妊産婦支援として何を考えればよいか〉

- ・ 気づかれにくく申告しづらい妊婦への配慮を考えていかなければいけない。
- ・ 妊婦の健康上のリスクを周囲が見ること。
- ・ プライベート空間の確保のため車中泊をする妊産婦もいるが、車中泊はエコノミー症候群が懸念されるため、その防止の支援が必要。

- ・ 産後すぐに退院した産婦と乳児には一般的なケアも必要だが、環境が変わっていることを踏まえた健康管理とケアも必要。
- ・ 乳児の栄養法：①母乳継続できるようにする、②人工乳の場合、不衛生な場所で調乳しなければならないため配慮が必要。
- ・ **妊産婦が災害時要配慮者であることを、周囲が知ることももちろん大事だが、妊産婦自身が認識していない方が多い。そのため、周囲も当事者である妊産婦自身も認識**していくためのアピールをしていく必要がある。
- ・ ①避難所に**妊産婦のための専用スペース**が用意される、② ①の中に**授乳スペースやおむつ交換スペースが普通の避難所にあるのが定番**になることが必要。
- ・ 福祉避難所について：

「母子」の文言を入れている福祉避難所は増えているが、静岡市の場合、子ども優先の場所は福祉避難所としては公表されていない。

→福祉避難所は高齢者主体になっているのではないか。また透析をしている方など要するにリストアップされている方が入りやすいようになっている印象がある。流動的な母子や乳幼児を把握するのは難しいため行政にとっても難しい部分があると思われる。
- ・ 母子避難所について：

ファミリー避難所のような家族で避難できる所という考え方が多い。助産師会や他府県で過去の災害時に母子避難所を開設しているが、結局家族同伴でないと避難してこない。「母子」避難として親子と限定すると、いるはずなのに全く利用者がいなかったという話も助産師会で出ている。

→夫や家族を置いて行くことへの気まずさと離れることへの心理的な不安があるようだ

⇒そのため「**母子避難所**」という名目も難しい
- ・ そこで、**通いの形**はどうか？：

母親は産後ケアのようなものをデイサービスのようないい方で受けている。朝に来所・夕方に退所の形で、来所中にゆったりと休む、お風呂に入る、育児のレクチャーを受ける、などができるシステムになっている。このスタイル（くつろげる場所、家族といて安心する場所）は被災後においても選択肢の一つとしてありだと考える。

→そうした場所を作った方が**支援者側のマンパワーも続く**。（今までの避難所を回ってケアしていく方法の場合、保健師が妊産婦・乳幼児の人数等を足しげく全て回らなければいけない状況になる。）

そうした場所の存在を**情報発信**し来てもらうことで、支援する助産師も疲弊せずに色々な支援ができるのではないかと考えると、**拠点を作ることも大事**。静岡大学でやるのもありではないか。

〈2022年の台風15号（清水区で浸水・断水被害）での沐浴ボランティアについて〉

- ・ 連休中に発生。車が浸かった中で断水し、高齢者や小さなお子さんのいる方は水を取りに行く移動手段がなかった。
- ・ 清水区の乳児の持つ母親が助産院（静岡市に十数箇所あり）に「沐浴やお風呂ができず困っているがどうしたらいいだろう？」と情報発信

→助産院が各地区にあるので、水道が使える葵区と駿河区で沐浴のボランティアをすることが即決した（連休明けの月曜日）

→沐浴ボランティアの実施を SNS で発信。静岡市や保健センターにも周知。テレビやラジオでも発信し早めに周知ができた。

→依頼の電話がすぐに来た。沐浴の家族を受け入れた。

〈最後に：自助力を高める支援を〉

- ・ 妊産婦には出産の喜びや希望に対して災害が起きるといふ想定が全くない。
→災害時の備えをこちら側から意識づけしていかなければいけない（SNS 等での情報発信や物の準備の呼びかけ）。災害前の活動をさらにしていかなければいけないと思っている。

（2） 作成中！「避難所子育てスペース設営ボックス」〈池田恵子さん（静岡大学ジェンダー研究所）〉

〈はじめに〉

- ・ **避難所の子育てスペース・乳幼室の設営ボックス**を作れないか？と考えている
- 経緯：いつまで経っても乳幼児・子ども連れの家族が避難所に避難したいと思える状況になっていかないため
- ・ 避難所の設営は行政だが、避難所の運営は自主防災組織に期待されている。静岡県において、避難所運営に不安がある自主防災組織は3分の2を占めている。乳幼児・子ども連れ以前に、そもそも避難所運営ができると思っている自治会町内会は3分の1しかない。
→この状況の中、静岡大学ジェンダー研究所の調査によると、防災訓練のメニューに、立ち上げ・設置・避難者の受入は実施しているものの、**更衣室・授乳室・授乳テント等の設置を実施したのは、静岡県内 35 市町のうち 4 市町**しかなかった。一方、ペットの受入訓練を実施したのは13市町あった。
⇒いかに乳幼児・子ども対策が考えられていないかが分かる。
 - ・ 能登半島地震での避難所の対応を男女共同参画の視点から見ると、発災1ヶ月以降(1月31日以降)も指定避難所が開設されていた14市町のうち、一週間以内に**授乳室**が設置されたのは1市町だけであった。また、14市町のうち、10市町は最終的に授乳室を設置していない。**キッズスペース**も9市町で全く設置していないまたは行政が把握すらしていない。
一方、更衣室、トイレを男女別にする、トイレに照明を付ける等は一週間以内に1避難所では必ずできていたのを把握している箇所が多くある。
→全体的にできていなかった(例えば人手不足や避難者数が多く大変だったことですべからくできなかった)ということではなく、やはり子ども関係の支援という部分ができていなかったのが実態ではないか。
→ではなぜ静岡県でペットの対策がこれほど進んだのか：**行政が「ペットスペース設営ボックス」を作り避難所に配布**している。設営ボックスの中にあるアクションカードの通りに手順を踏めば知識がない人でも誰でもできるようになっている。(まずペットを連れた避難者を3人見つけてください。→受付に行き避難所の本部に行ってペットスペースを作りたいことを申し出てください。というようにステップ・バイ・ステップで丁寧な説明がある)
→ここまでやるような行政の力の入れように対して子ども関係の支援の不十分さに非常に疑問を感じる。
→いつまで待っても子どもスペースができなかったのが能登半島地震の結論だと考える。分かっているのにやらない。自治会町内会にお任せしている限りは多分いつまでたってもできない。

〈避難所に子育て家族のスペースを作るためのアイデア（2025年10月12日開催の避難所Camp参加者より）〉

- ・ 以上を念頭に、2025年10月12日の静岡県立大学小鹿キャンパスでの避難所Campにて、避難所レイアウトを参加者で決め、レイアウトに沿って授乳室と子どもスペースを設営した後、どのような授乳室がいいか等を振り返るワークショップを実施した(避難所に子育て家族のスペースを入れるにはどうしたらよいかアイデアを参加者から出してほしかったため)。(以下はその結果のまとめであり、具体的にこのようなアクシ

ョンカードにするのがよい等が出せる段階に達していないが、皆さんにご意見を頂ければと思っている)

Q1. どういう設備や施設が授乳室やキッズスペースに必要だろうか。どんな工夫や注意点があればいいか。

A1. 【授乳室】：防音、目隠しがある、換気が良い、人目を気にせずに落ち着ける場所、覗かれるのが不安なので透けない素材のテントがいい。

【子どもスペース】：走り回れる広い場所、外でもよいのでは、居住スペースから少し離れた場所（体育館の2階等）にあった方が子どもが気兼ねなく遊べてよい、子どもが遊ぶスペースをコーンとロープで区切る、**見守る人が必要**という意見が多く**保育士や子育て経験のある人**が見守りを担当できるのではないかと

【どうしたらいいか迷ったこと】：

- ① 授乳スペースとおむつ替えは一緒のスペースでいいのか？→医療関係者の方のご意見を伺いたい
- ② 授乳室と子どもスペースは一緒にするべきか分けるべきか？
→一緒にするとうるさいが、別々にすると上の子どもと離ればなれになってしまう
- ③ 男性でおむつ替え室や授乳室を使う人はいるが、それは女性から見てどうなのか？

【その他】

- ・子育てスペース設営ボックスがあるのに誰も知らないで使用されないということは避けたい。普段から周知しておく必要がある。

Q2. 誰が設置するのか？

A2. ペットとは異なる部分がある。ペットはケージにおいて放置してもしばらくは大丈夫だが、子どもはそうはいかない。だが母親自身が設置するのは難しい。

→・避難所の運営を任されている自主防災会

- ・アクションボックスを開けた人
- ・理想は自治会長だが自治会長にやってもらえないのではないかと
→自治会長に意見を言える助産師、民生委員、行政職員がいいのではないかと
- ・自主防災会は女性が少ない→女性と子どもも参画しているとよい

Q3. 誰が運営に関わるか？（この議論が難しい）

A3. ・**利用する家族**、父母、祖父（積極的に父・祖父の関与を求めていく）
・**親の経験がある方**など、**みんなで関わって**いけたらよい

Q4. どのようなサポートがあれば育児中の父母が子育てスペースに関われるか？

A4. ・**子どもを見てくれる体制**があると自分も関われる

- ・**安心して子どもがのびのびと動いて**、自分がトイレに行く時に他の人が見てくれる環境があると関われる
- ・**親子の交流ができる母子ルーム**があるとよい
- ・一人で意見を伝えるのは勇気がいるため、同じ子どもがいる**母親同士で話し合う**ことができると**みんなの意見として伝えられる**
- ・話を遮ったり伝えたりしても**否定されない場**がほしい

- ・助産師に関わってもらえると父母や本人たちも関われるのでは

〈今後〉

- ・これからどう進めていくかは悩む所が大きい
- ・時間があれば皆さんとディスカッションしてみたいと思っていた
→ご意見あればメール・LINE などでご意見いただければありがたい

(3) みんなで考える医療的ケア児と防災〈北村憲一さん（静岡障害児等防災ネットワーク SHINE・静岡県立こども病院医学療法士）〉

〈静岡障害児等防災ネットワーク SHINE を立ち上げたきっかけ〉

普段から子どものリハビリを行う中でもらうものが多く、そのお返しをしたいということでマルシェなどの楽しいことをしていたが、身になることもやりたいと思い、医療的ケア児の防災キャンプをやるために立ち上げた。

〈静岡障害児等防災ネットワーク SHINE について〉

「すべての子どもたちが自分らしく輝ける未来を」をテーマに、障がいの有無に関わらず、みんなが安心して過ごせる社会を目指している。主に防災キャンプの実施を今回の仕事としている。

〈防災キャンプの目的〉

- ・医療的ケア児とその家族が避難生活の体験をすること
- ・災害時に必要な準備・課題に気づくこと
- ・参加者同士がつなげる・つながるようになること

〈防災キャンプ実施日〉

2025年9月6日～9月7日の2日間

〈医療的ケア児の特徴〉

- ・特別な医療的ケアや医療機器が日常的に必要
→電気や、清潔にしなければいけない物が多い
- ・人工呼吸器：息をする力が弱い場合に呼吸を助ける機械。かなり電気を使用する
- ・気管切開：首に手術で開けた小さな穴にチューブを入れ、そこから呼吸をする。気管切開をしている人は咳が弱いため痰が溜まりやすく、痰が詰まると息ができないため、吸引という痰を取り除く機械もある（手動もあるが基本的には電動を使用している）
- ・口から食べることが難しい場合：口から食べると誤嚥しやすいため、鼻から胃まで届くチューブを入れて栄養を摂取できるようにしている。
⇒上記の医療機器は子どもたちの命を支える大切な道具

〈医療的ケア児が災害時にどんな課題があるか〉

① **電源**の確保：

人工呼吸器のバッテリーは想像以上に電力を消耗する。**ポータブル電源、予備のバッテリー**が必要。医療機器本体よりも**加湿器**（乾燥しないために使用）の方が電力を消耗する。

② **清潔さ**の確保：

器官に直接触れる物は清潔さを保つ必要があり、そのことは災害時には難しい。

食事に必要なチューブが細く、洗浄しないと詰まってしまう→**綺麗な水**を確保・使用する必要がある。

③ **温度の調節**：外気温によってはすぐに冷える場合も多く、体温や周辺の温度調節が難しい。

④ 医療機器やケアの**音**が出てしまう：

医療機器のアラームの音、医療機器が空気を出し入れをする音、自分で体を動かすのが難しい子どもに対し保護者は夜に起きて体の向きを変えてあげている→避難所の他人と隣接した環境でケアのために夜にガサガサと音を立てる時に周囲に「ごめんなさい」と謝りながらケアしている。音が出るためにケアがやりにくい。→ここで医療機器の音を実際に流していただいた。私はかなり大きい音だと感じた。大きい目覚まし時計の音、車の通りが多い場合くらいの音量と言われており、それを普通の避難所で出すのは難しい。福祉避難所であってもお互い気を遣うが、命に関わる物は絶対に必要なため、音は大きな問題である。

⑤ **荷物の多さ、運搬手段・方法**：色々な荷物（医療的な物、薬品、清潔に保つための道具）があり、荷物が多い。→北村さんが台風15号で被災した際に、（荷物の運搬のため）車が動けないと何もできなかった。医療的ケア児が車に入れてやっと運び出せるほど多い荷物を、リュックに入れるのは絶対に無理である。

⑥ **プライベート空間**の確保：10歳過ぎ、20歳過ぎでトイレをおむつでしている人が多い。大人の方がパーティションのない所で排泄するのはハードルが高いため、プライベート空間の確保が必要。

⑦ **照明**の確保：保護者は夜も色々なケアをしている。→照明が無く真っ暗な状況では、自宅ならどこに何が分かるか分かるが、避難所では物の位置が変わり分からなくなってしまうという問題がある。

⑧ **福祉避難所が開設されるまでに発災から約3日かかる**：

福祉避難所に入所するまでの流れ：一般的な避難所に入所する→自治会長・自主防災組織が本部に上げ、福祉避難所宛てに、開設してよい連絡がされる→対象家族に連絡される（発災後約3日かかる）

北村さんは上記が「衝撃でそんなの待てない」と話した。

音の問題があり一般の避難所には行けないため自宅にいるが、誰がその在宅避難を知るのか？という問題がある。

→ **普段から自治会長・民生委員などと医療的ケア児自身も関わる** 必要がある。

・ **個別避難計画**を作る大切さ：どこに避難するか、必要な備品、連絡先を記載しておく必要がある。

〈防災キャンプで体験したこと〉

- ・ テントで寝る家庭、マットで寝る家庭もあった。一つの空間にみんなで一晩過ごした。
- ・ 福祉避難所についての勉強会：静岡市職員、社会福祉協議会、DWATなどが開催。福祉避難所はすぐに開設されないことを学んだ。
- ・ **防災食**の勉強会：口から食べるのが難しい医療的ケア児が災害時に支給される物でいかに栄養を取るかについて、加工の仕方を栄養の先生から学んだ。
- ・ 停電の体験（**電源、電気、水道は使えない**）を17:00から21:00まで行い、不便さを体験した。
- ・ 非常に大事なのが、**家族同士の情報交換座談会**：普段やっていることを共有した。
- ・ 一晩明けた後、**参加してどうだったかの共有**

・プライベート空間を作成した

〈防災キャンプ参加者からの参加後の感想〉

- ・体験してみると**バッテリーの消耗が想像以上に早い**ことが分かった。
- ・ポータブル電源に、医療機器に**使ってよい物と使ってはいけない物**があった。
- ・荷物が多くて**テントの設営が大変**だった。
- ・**プライベート空間の確保に苦労**した：テントは開いていると上から見られてしまう
- ・大切だと感じたのは、**家族や仲間とのネットワークの重要性**、それだけではなく、**自治会や地域との連携**は大事にしないといけないこと。
- ・**繰り返し訓練して経験**しないと分からないということ。それを経験できて良かった。

〈まとめ〉

- ・みんなで支え合うために、**医療的ケア児と家族が安心して暮らせる社会づくり**が大切
- ・医療的ケア児が安心だったら多分みんな安心だと思っている
- ・日頃から**色々な地域の方とも繋がっておく**ことが災害時の助けにつながる

〈今日からできること〉

- ・(子どもや保護者に向けてもいえることだが) **ご近所の方、自治会の人、民生委員との関係づくり**は非常に大切
 - ・**個別避難計画を作成**する
 - ・**ポータブル電源**などの備え
 - ・**定期的な訓練**
- ★一番大事なのは**人のつながり**：普段からお互いを知り助け合う**関係性**を作っていきましょう。
(地域のお祭りに行くなど)

19:00～19:30 終わりに「地域で防災・大学で防災」(地域創造学環棟 301 教室)



〈白井教授より〉

- ・大学で防災を考える**貴重な機会**になった。
- ・実際に設営したり、このイベントでやったように**実際の体験**をしたりすることができたらよい。またこのよう

に集まれたら嬉しい。

その後、マイクを回して参加者の感想を共有した。

〈参加者からの感想〉

- ・ **LGBTQ** に関して自分の無知さを学んだ
- ・ 災害派遣福祉チーム DWAT の事務局もある静岡市社会福祉協議会に勤務されている方：
沢山の方を回らなければならないなと感じた
- ・ 福祉避難所の対象は高齢者だけでなく沢山の方がいると感じた。何ができるかを考えていきたい。
- ・ 自分の知識がまだない中、こうした場で学べることは沢山あると思ひ、この場を作っていただいたことに感謝したい
- ・ 自治会の役員の方：12 月初旬の防災訓練の内容の参考にできたらいいなと思った。今年から要配慮者支援について自治会からアクションを起こすように言われており、どうしたらいいかなと考えていた。地域のつながりということで積極的にヒアリングに行こうかなと勇気づけられた。
- ・ 以前は静岡県に住んでいたが現在は滋賀県に引っ越している方：滋賀県は地震が全くない県なので防災意識がほとんど無く、町内会の役員なので来週に防災訓練をするが誰も参加者がいないくらいの勢いなので、モチベーションを上げようと思ひ参加した。子育て短期支援事業というものがあり、ずっと里親をしていて夫が地域の子ども 3 人を預かっている。何があるか分からないからオープンに意識を持っておきたいと思う。
- ・ 静岡大学 1 年（学生防災ネットワーク所属）：自分は大学でジェンダーについて研究していて、**ジェンダーの視点から捉える防災**は自分にはない視点で非常に面白かった。自分自身の学びにもなったのでとても楽しかった。
- ・ 静岡大学生（学生防災ネットワーク所属）：リカレントセミナーも勉強になったし、防災ボトル作りも楽しく作ってもらえたら良かったなと思う。
- ・ 静岡大学大学院生：LGBTQ と防災について色々なことを学べた。**色々な人と出会った。**
- ・ 静岡大学 2 年（学生防災ネットワーク所属）：水で作る焼きそばを食べた。美味しかった。防災食が好きなものでこれからも色々探していきたい。
- ・ 静岡大学 1 年（学生防災ネットワーク所属）：静岡大学の池田恵子先生のジェンダーと防災の授業で学習していたが、今日こんなに**深く勉強できたのが良かった。防災食を食べることができて良かった。**私はどうどんが一番好きでした。
- ・ 静岡大学 1 年（学生防災ネットワーク所属）：色々な視点から防災に関してアクションを起こしている方々が集まって**地域全体で防災力を向上していこうという取り組み**に参加でき、すごく**勉強になったし**、これからも所属団体の学生防災ネットワークでの防災啓発活動と個人の防災力向上を頑張っていきたい。
- ・ 要配慮者の中には、**高齢者や障害者だけではなく、LGBTQ の方や妊産婦の方もいることが分かった。**
- ・ 非常に**多様なニーズ**があるということを知ることができてよかった。

〈白井教授から結びの言葉〉

- ・ 防災を通して色々なことを学んで色々な人と繋がって地域を作る、作っていくのはとてもいいなと思うので、また企画した時にはご参加よろしくお願ひします。
- ・ 今回テーマに含められなかった留学生・外国人は、地震が怖い、地震を体験したことがない、言語の壁、避難所という仕組みを知らないなど、多くの課題が表れると思うので、次のテーマにできたらと思う。

《筆者の参加後の感想》

大切だと思った点は下記2点である。

① 「正しい防災知識を学ぶ機会」と「学んだことを実践する機会」の両輪の大切さ

防災では正しい知識を身につけた上で、学んだことを実際に体験する・まずやってみる、という両輪が非常に大切だと感じた。誤った知識で実践しても効果はないし、逆に正しい知識を得てもそれを実践しなければ備えの効果は発揮されないからだ（このことは防災に限らず全てにおいて言えるとも思う）。

本イベントは前半のリカレントセミナーで正しい防災知識を学んだ上で、後半の体験型イベントで実践するという両輪で構成されていた。13:00～19:30の6時間程度の時間で、多角的な視点から深く学ぶとともに、参加者と交流しながら体験でき、多くの学びと実践を得られた非常に貴重な機会であった。

② 普段から地域や色々な方々と「繋がる・繋げる」大切さ

これは講座で講師の方の多くが仰っていたことで、防災関係なく人が「繋がる・繋げる」ことの大切さを改めて認識した。普段から防災関係なく交流し地域の中で繋がりができていれば、災害時に地域での共助が発揮されやすくなる。私自身も地域の方、防災関係の方、(防災は多分野に関わるので) 様々な分野の方と繋がるとともに、他の方も繋がりが持てるように「繋げる」支援もしていきたい。

今後も本イベントのような学んで実践する防災イベントが大学や地域で開催される際にはぜひ参加・協力したい。また、大学や地域で防災の輪と繋がりが広がるよう、今回の学びと交流を活かして今後も活動に尽力したい。

最後に、本イベントのコーディネーターである白井千晶教授、ご登壇いただいた講師の皆様、ご参加いただいた皆様、ご協力いただいた皆様に、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。